

# かしま医療過疎

## 島・へき地支える

住宅地が広がる旧始良町の市街地から北部へ十数キロ。静かな山あいには口グハウス風の始良市立北山診療所は立つ。毛利通宏所長(65)と看護師3人が、過疎、高齢化が進む北山地区の約280世帯500人を支える。診療所からさらに離れた木津志、木場、堂山の3地域

④

には、出張診療所があり、1〜2週間に1回出向いでいく。

3月上旬、北山診療所の相談室に毛利所長や看護師、民生委員、地域包括支援センター職員ら約10人が集まった。独居や健康面に不安があり、見守りが必要な約30人について3カ月に1度、対応を話し合う「地域担当者会議」だ。

「糖尿病が進んでほとんど動けなくなっている」。民生委員が、ある女性について説明した。「病院には行っているのか」「同居家族の様子は」。出席者は、情報交換しながら支援策を探る。「一度保健師さんに訪問してもらいましょう」「診療所からも様子を見に行ってみます」。地域での見守りを強化することにな

## 地域で守る



患者の対応策を話し合う毛利通宏所長と看護師  
＝始良市北山の市立北山診療所

った。  
■ □ ■  
毛利所長が旧始良町な始良駅近くで25年開業していたが、60歳の節目に

に赴任したのは2005年4月。それまで、JRもつと地域に入って予防医療に力を入れたい、とクリニックをたんだ。赴任後、医療機関を受診しつづける患者や、経済的に受診できない患者など、診療所で待たされては分からない「見えない患者」が多いと気付いた。

どこに、誰が、どんなふうにも暮らしているのか。把握するため、看護師や行政と協力し「住民マップ」を作り始めた。地図上で民家がある場所にシールを張り、名前を書き込んでいった。

06年5月、再び独居男性の姿が見えなくなつた。毛利所長らが訪れると、男性はひっそりと亡くなつていた。「最大の不幸。二度と同じことを繰り返したくない」と、「見えない患者」の情報共有に一層力を入れた。

「調子はどうね。あさつては出張診療所に行くよ。顔を見せねえか」と、胸が苦しいとかなかけ。3人の看護師は仕事の合間に、病状が気になる人、高齢者だけの世帯、前日に受診した患者らに電話をかける。

「フライバシーと、住民の命を守るのを両立させるのは難しい」と毛利所長。一方、「どんなに綱の目を張り巡らしても、救えない人はいる。でも、やるわけにはいかない」。

「調子はどうね。あさつては出張診療所に行くよ。顔を見せねえか」と、胸が苦しいとかなかけ。3人の看護師は仕事の合間に、病状が気になる人、高齢者だけの世帯、前日に受診した患者らに電話をかける。

「フライバシーと、住民の命を守るのを両立させるのは難しい」と毛利所長。一方、「どんなに綱の目を張り巡らしても、救えない人はいる。でも、やるわけにはいかない」。

# 「見えない患者」発掘

毛利所長と看護師は、今日も患者に会いに地域に向く。